

日本人医師・看護婦の証言からみる 広島 ABCC 設立草創期の看護

Nursing during the early period of the operation of the Hiroshima Atomic Bomb Casualty Commission: From the testimony of Japanese doctor and nurses

船木 沙織^{1, †} 城丸 瑞恵²

Saori FUNAKI^{1, †} Mizue SHIROMARU²

キーワード：ABCC、放射線被ばく者医療、証言（オーラルヒストリー法）

Key words：ABCC, health care of the radiation-exposed, oral history approach

要旨：本研究は原爆傷害調査委員会（以下：ABCC）に勤務していた看護婦および医師の証言から、広島 ABCC 設立草創期の健康調査および健康診査における看護活動を明らかにすることを目的とした。研究方法は広島 ABCC で勤務していた元 ABCC 日本人医師 1 名、看護婦 3 名を対象に半構造化面接を実施し、オーラルヒストリー法を用いて証言を分析した。結果、健康調査、健康診査における主な看護は診療の介助であったが、各診療科では健康調査の目的や調査概要によって重要とされる視点に基づき、看護を実施していたことが示唆された。また、調査研究機関として精密なデータを収集するという役割があり、被爆者に対する言動や調査方法に配慮した看護が行われていたことが明らかとなった。ABCC の活動に対して被爆者から否定的な言動もみられたが、被爆者の感情に配慮した看護活動は、健康調査および健康診査に対する緊張を緩和する重要な役割があったと考える。

This study explores nursing in health surveys and checkups during the early period of the operation of the Hiroshima Atomic Bomb Casualty Commission (ABCC), as related in the narratives of nurses and doctors working there. Semi-structured interviews were conducted with three Japanese nurses and one doctor who had worked in the Hiroshima ABCC, and their narratives were analyzed using an oral history approach. It was concluded that their main activity during health surveys and checkups was assisting in medical treatment. It was suggested that each nursing department conducted nursing activities based on the purpose of the surveys and checkups. Nurses also played a role in collecting precise data as staff of the research institute and during their nursing, focusing on attitudes toward atom-bomb survivors and test methods and practices. Some survivors displayed negative behaviors with regard to the health surveys and checkups. This study's findings suggest that nurses played an important role in treating survivors by alleviating their stress they felt during the surveys, providing them with needs based checkups, and caring for their emotional issues involved.

1 札幌医科大学大学院保健医療学研究科 Graduate School of Health Sciences, Sapporo Medical University

2 札幌医科大学保健医療学部看護学科 Department of Nursing, School of Health Sciences, Sapporo Medical University

† 連絡先：船木沙織 (ootake@sapmed.ac.jp)

I. 研究の背景

1945(昭和20)年に広島、長崎に原爆が投下された以後、原爆による放射線の健康影響について長期的に調査を行い、当時の放射線被爆者医療の中心となったのが原爆傷害調査委員会(Atomic Bomb Casualty Commission: 以下 ABCC)であった。ABCCは1948(昭和23)年3月から乳幼児の遺伝学調査、同年10月から小児の発育発達調査を実施した。1950(昭和25)年には白血病調査および成人医学調査を開始し、その後1975(昭和50)年に放射線影響研究所(以下放射研)に改組されるまでの28年間、活動が行われた。

ABCCはその設立目的を、原子爆弾放射線のヒトに及ぼす医学的影響を幅広く長期にわたって調査研究を行い、被爆者の健康保持の問題に貢献し、また同時に原子力の平和利用に際して起こりうる問題の解決に寄与すると謳っている¹⁾。その目的達成のための重要な方法は定期的に健康診査を行うことであり、診査を受ける被爆者にはその診断が健康管理として役立つ²⁾と説明していた。これらの健康調査および健康診査を行うにあたり、ABCCでは日米の医師、看護婦が協働していた。

ABCCの看護活動については、長崎 ABCCにおいて被爆者と健康診査の調整をする連絡員であった藤田芳子の証言³⁾からその活動の一端を把握することができた。しかし、広島 ABCCに勤務していた看護婦の具体的な看護活動を分析した研究は、著者が調べた限りでは発見できなかった。

今回、広島 ABCCに勤務していた日本人医師1名、看護婦3名から、オーラルヒストリー法を用いて ABCCで行われた健康調査および健康診査における具体的な看護について、データ収集を行った。広島 ABCCでの看護活動という特殊な体験を研究対象としているが、チェルノブイリ原子力発電所事故、福島第一原子力発電所事故、核実験などによる放射線被爆者が存在しており、放射線被爆者医療における継続的な看護支援に示唆を得ることができると考える。また、占領期に設立された ABCC という特殊な環境の中で被爆者の長期的な看護支援を行った看護婦の体験は貴重なものであり、記録しておくべき有益なものである。

II. 研究の目的

ABCCに勤務していた医師・看護婦の証言から、

広島 ABCC 設立草創期の健康調査および健康診査における看護活動を明らかにすることである。

III. 用語の定義

1. 放射線被ばく者

本研究で示す放射線被ばく者とは原爆によって被害を受けた被爆と放射線にさらされた被曝⁴⁾の両者を示す。

2. 健康調査および健康診査

本研究で示す健康調査とは放射線被ばくの健康に関する実態、動向を調べることであり、健康診査とは個々の状況に行われた診察および検査とする。

3. 看護師の表記について

「看護師」は2002(平成14)年3月以前は、「看護婦」と称する。

IV. 方法

1. 研究方法

本研究は歴史的事実を確認するために、元 ABCC 医療職の面接調査を実施し、オーラルヒストリー法を用いて分析した。オーラルヒストリー法とは個人から生活体験などを聞き、文字資料からでは知ることのできない体験の個別性、歴史の細部を記録に残す作業である⁵⁾。本研究は中村の提示したオーラルヒストリー法⁵⁾を参考に、史料と得られた証言を組み合わせて考察する方法を行った。

1) 史料調査

歴史研究の手法は多岐にわたるが、本研究は東京大学教養学部歴史部会編集の史料学⁶⁾を参考に、史料を探索した。分析史料は史料批判の視点に基づき、正確な読解、解釈、すなわち事実を確定させるために使用した。本研究で示す史料批判とは、1) 当事者の遺した史料を優先すること、2) 時間的近接性の高い史料を優先すること、3) 読解、解釈の一貫性を慎重に吟味することである。収集した史料の読解・解釈は、歴史学に通じる共同研究者1名のスーパーバイズを受けながら実施した。また、根拠となる史料の引用を明示した。

(1) 主な史料

歴史研究で用いる史料は、当事者がその時々に残した手紙、文書、日記などを一次史料、第三者が記したそれらやのちの記録を二次史料とされる。本研

究で使用した主な一次史料は以下のとおりである。

- ・国立予防衛生研究所，原爆傷害調査委員会（編）. ABCC—予研共同研究総括報告 1947-1975. 原爆傷害調査委員会，広島，1978. pp. 222-240.
- ・国立予防衛生研究所，原爆傷害調査委員会（編）. ABCC20年の歩み. 国立予防衛生研究所，東京，1966. pp. 1-19.
- ・原爆傷害調査委員会. A brief review of the ABCC medical program. 広島医学. 1962, 15(8). 764-770.

(2) 分析の視点

1947(昭和22)年から1954(昭和29)年までのABCC設立草創期を通し、ABCC医療職が行った「健康調査」、「健康診査」を分析の視点とする。

(3) 史料の分析方法

- ①研究目的を考慮して史料を収集した。
- ②資料保存、整理のために収集した史料の目録を作成した。ABCCの資料目録を表1に示す。
- ③収集した史料から、分析の視点に沿ってABCC医療職の「健康調査」、「健康診査」に関わる箇所を抽出した。

表1. ABCCに関する文献目録

No.	タイトル	著者	雑誌名・出版社	巻号	頁	出版年
1	小児科医ドクター・ストウ伝	長澤克治	平凡社			2015
2	冷戦下における放射線人体影響の研究：マンハッタン計画・米原子力委員会・ABCC(特集 国際原子カムラ：その虚像と実像)	高橋博子	日本の科学者	48(1)	6-13	2013
3	聞き書き 藤田芳子の戦前・戦後：大連での生活と長崎 ABCC のこと	木永勝也・長崎女性史研究会	平和文化研究	33	73-101	2012
4	海外被爆資料の研究：米軍病理学研究所 (AFIP) を中心に	高橋博子	広島平和記念資料館資料調査研究会研究報告	3	37-53	2007
5	放射線被ばくと看護—むかしと今—	司会：植田喜久子 話題：竹島直枝、栗原幸美、河村敬子	第4回日本赤十字看護学会学術集会テーマセッション VI	4(1)	48-52	2004
6	特別講演 放影研と原爆後障害研究について	平良専純	長崎医学会雑誌	79	115-123	2004
7	Suffering Made Real: American Science and the Survivors at Hiroshima	M. Susan Lindee	The University of Chicago Press			1994
8	Miller's memories of ABCC-RERF, 1953-1990. Part 1	Robert W. Miller	RERF Update.	5(4)	7-9	1993
9	The very early years of the ABCC Genetics program, 1946-1951	James V. Neel	RERF Update.	2(3)	6-9	1990
10	広島・長崎の原爆放射線影響研究—急性死・急性傷害の過小評価—	中川保雄	科学史研究 第II期	25(157)	20-33	1986
11	原爆後障害 ABCCに関するノート その2(遺稿)	松坂義正	広島医学	35(1)	110-126	1982
12	原爆後障害 ABCCに関するノート その3(遺稿)	松坂義正	広島医学	35(2)	210-219	1982
13	原爆後障害 ABCCに関するノート その4(遺稿)	松坂義正	広島医学	35(4)	543-553	1982
14	原爆後障害 ABCCに関するノート その1(遺稿)	松坂義正	広島医学	34(11)	1149-1163	1981
15	国立予防衛生研究所，原爆傷害調査委員会（編）. ABCC—予研共同研究総括報告 1947-1975	原爆傷害調査委員会				1978
16	原爆被爆者における放射線の後発性影響 原爆傷害調査委員会の主要調査結果に関する評価 (ABCC 欄—10)	Miller Robert W.	広島医学	26(10)	1212-1219	1973
17	—ABCC 欄—ABCC SECTION (84) 原爆傷害調査委員会 (ABCC) の貢献	R. Keith Cannan	広島医学	24(4)	280-287	1971
18	人体に対する放射線の影響 (原爆傷害調査委員会 (ABCC) 報告)	Johnson Kenneth G. Antonio Ciocco	広島医学	22(12)	1197-1208	1969
19	災害との遭遇 広島医学日記 1954年	Liebow Averil A.	広島医学	20(2)	233-332	1967
20	ABCCは何をしてきたか—そのあり方と科学者の批判	志水 清	科学朝日	27(9)	79-84	1967
21	ABCC問題について	杉原芳夫	日本の科学者	2(3)	29-33	1967
22	ABCC20年の歩み. 国立予防衛生研究所，東京，1966	国立予防衛生研究所、原爆傷害調査委員会共編				1966
23	独特な研究 原爆傷害調査委員会、放射線部	Russell W. J.	広島医学	18(8)	800-807	1965
24	Atomic Bomb Casualty Commission The first fifteen years.	Cannan R. K.	広島医学	17(4)	317-124	1964
25	ABCCの医学的調査計画の概要について A BRIEF REVIEW OF THE ABCC MEDICAL PROGRAM	原爆傷害調査委員会	広島医学	15(8)	764-770	1962
26	原爆障害調査委員会 (ABCC) は何をしてきたか	H. Grant Taylor	科学	22(6)	315-322	1952
27	ABCCとは何か	岡 寿磨	科学朝日	10(2)	16-19	1950

④歴史学に通じる共同研究者のスーパーバイズを受け、史料から抽出されたデータの読解、解釈を行った。

2) 面接調査

(1) 研究対象者と選定理由

研究対象者は、1947(昭和22)年からABCC閉所の1975(昭和50)年まで、広島ABCCで勤務していた元ABCC日本人医師である玉垣秀也氏、看護婦である湊 潔子氏、田中久江氏、中村豊子氏の計4名である。勤務していた対象時期を1975(昭和50)年までとした理由は、以下の2点である。

①1947(昭和22)年から1954(昭和29)年の間に勤務していた元ABCC医療職は、高齢であり、すでに他界されている可能性があったからである。

②ABCC閉所まで勤務していた医療職の中にはABCC設立草創期の医療職と共に働いていた可能性があり、草創期の状況について伝承されている可能性があると考えたからである。また、医師を研究対象とした理由は、看護婦の活動を論じるためには、看護婦に影響を与えた背景を探索することが重要である⁷⁾といわれており、看護婦と医師の双方を含む医療職を対象とすることで、今後の放射線被ばく者医療における看護師の活動をより深く考察することができると考えたためである。

(2) データ収集期間

データ収集期間は2016年10月～2017年1月末である。

(3) 面接調査の分析方法

分析方法は以下の手順で行った。また、研究参加者の証言は、「 」で示した。

- ①インタビューガイドに基づき半構造化面接法によるデータ収集を実施した。
- ②面接調査はICレコーダーを用いて録音し、録音したデータの内容を忠実に文書化して証言記録とした。
- ③証言記録を繰り返して読み直した。
- ④研究参加者に証言記録の内容が正しいか、不利益な情報がないか確認した。
- ⑤証言記録から得られた体験内容から、「健康調査」、「健康診査」に関する内容を抽出し、整理した。抽出された証言は史料を活用して検証した。必要に応じて再インタビューを行った。
- ⑥検証された証言と史料を統合して考察した。

(4) インタビューガイド

研究対象者には、以下のような半構造化面接に関する質問内容を予め郵送し、面接を行った。本研究では質問紙に記載された内容と口述を分析対象とした。質問内容は以下の4項目である。

- 1) 基本属性(年齢、職種、ABCCにおける活動経験数、活動期間)
- 2) ABCCに勤務することになった経緯について
- 3) ABCCでは被爆者の健康調査はどのように行っていたのか
- 4) ABCCでは被爆者の健康診査はどのように行っていたのか

2. 時期区分について

先行研究においてABCCが存在した時期区分を明確に示したものは見当たらなかった。このため、本研究ではABCCが設立、調査が開始された1947(昭和22)年からABCCの活動基盤となった統合研究計画が立案・実施される前の1954(昭和29)年をABCC設立草創期とする。この時期は初期のABCCの研究計画である遺伝学的影響調査が実施された。当時、放射能による先天奇形の増加については把握していたが、その他の身体への影響はほとんど明らかにされていなかった。このため、ABCCの研究調査はそれぞれの研究者が独自の研究計画を立て、模索している状況であった。

3. 信頼性と妥当性

分析の妥当性を高めるため、研究対象者のメンバーチェックを受け、またデータの分析・解釈はオーラルヒストリー法および歴史学に通じる共同研究者1名とともに実施した。

V. 倫理的配慮

本研究は札幌医科大学倫理委員会の承認を得て実施した(倫理承認番号:28-2-33)。

研究参加者には研究目的・方法・意義、研究協力の任意性、協力中断の自由、面接による不安や緊張・身体的苦痛などの負担が察知された場合面接を中断すること、歴史学におけるオーラルヒストリー法は個人の証言が史実となるため、個人の人格を明確に表現する方法であり、氏名、経歴など個人情報を公開することについて説明し、面接調査実施の承諾を得た。

VI. 結果

1. 史料調査の結果

1) ABCC の活動概要

ABCC 設立草創期の健康調査および健康診査における看護活動について記載する前段として、本稿では史料調査から得られた ABCC の活動概要について以下に述べる。表 2 は ABCC の活動概要に関する年表である。

ABCC の健康調査は、1948(昭和 23) 年 3 月に、被爆者から生まれた子供を対象とした遺伝学調査がいち早く取り組まれた。また、同年 10 月から被爆した子供を対象とした成長および発育調査である主要小児科研究プログラムが実施された¹⁾。これらの調査で胎内被爆者の小頭症の存在が明らかとなった⁸⁾。1950(昭和 25) 年には白血病調査および成人医学的調査が開始された¹⁾。白血病調査では 1958(昭和 33) 年までに広島、長崎両市において 231 例発見され⁹⁾、爆心地の距離と放射線被爆に起因し発病することが確実⁸⁾との所見が明らかとなった。その後、1955(昭和 30) 年に米国学士院—学会議の特別委員会が ABCC 研究計画を再検討し、寿命調査、成人健康調査、病理学的調査、原爆被爆者の子供の死亡に関する調査を調査項目とする統合研究計画が勧告された¹⁾。統合研究計画は ABCC の基盤となる研究調査であり、統合研究計画の調査項目の中には、現在の放影研で引き継がれている項目もある。

2. 面接調査の結果

1) 研究対象の背景

- ① ABCC における活動期間 ② ABCC に入所し

表 2. ABCC 設立草創期の活動概要

年月日	活動概要
1947 年 3 月	広島赤十字病院の一部を借り受けて、ABCC 開設
1948 年 1 月	ABCC が旧凱旋館（広島県宇品市）に移転
3 月	主要遺伝学調査開始
10 月	長崎にて主要小児科研究プログラムを開始
1949 年 3 月	広島・呉にて主要小児科研究プログラムを開始
8 月	ABCC 被爆者人口調査を開始
1950 年 1 月	白血病調査開始
8 月	広島で成人医学的調査を開始
11 月	広島市比治山研究施設へ移転開始
1951 年 1 月	胎内被爆児調査開始

国立予防衛生研究所、原爆傷害調査委員会編（1978）を参考に筆者作成

た経緯

(1) 玉垣秀也氏

- ① 1949(昭和 24) 年～1965(昭和 40) 年
② 広島赤十字病院にインターンとして勤務していた際に ABCC 遺伝部の活動を知った。免許取得直後である経験のない医師でも働けるため応募した。

(2) 湊潔子氏：遺伝部婦長

- ① 1949(昭和 24) 年～1966(昭和 41) 年
② 家計を助けるため病院に勤務しようとしたが、子育て中のため夜勤が多く断念していた。その際に ABCC に勤務していた看護学校の同期の紹介を受け、入所した。

(3) 田中久江氏

- ① 1951(昭和 26 年)～1987(昭和 62) 年（ABCC、放射線影響研究所勤務）
② 英語をマスターしアメリカ留学を目指したいと考えていたころ、広島在住の祖母の助言を受け、採用試験を受けた。

(4) 中村豊子氏

- ① 1964(昭和 39) 年～1996(平成 8) 年（ABCC、放射線影響研究所勤務）
② 子育て中のため休職していたが、中国新聞の広告に掲載されていた ABCC の看護婦募集に土日休みと記載されていたこともあり、応募した。

2) 健康調査における家庭訪問時の看護

前述のとおり、ABCC の健康調査は、1948(昭和 23) 年 3 月から主要遺伝学調査を開始した。医師、看護婦の証言によって当時行われていた遺伝学調査の計画立案過程を明確にすることはできなかった。しかし、実際に家庭訪問を行っていた玉垣氏、湊氏の証言から、遺伝学調査の主たる業務である乳児の家庭訪問の具体的な内容が明らかとなった。以下に玉垣氏、湊氏の証言を示す。

玉垣氏の証言

「(遺伝部の仕事は) 家庭訪問が全てでした。」
「ジープに乗って。日本人の医師と看護婦とドライバーの 3 人でした。」
「表面の異常 (外表奇形)、それから心臓が主ですね。聴診をして、目を見たり、耳を見たり、一通りみます。」

遺伝部婦長をしていた湊氏の証言

「家庭訪問は、まずコンダクター（連絡員さん）が、患者さん（生後40日前後の赤ちゃん）の予約を取ります。」

「カードをもとに、ドライバーさんがジープで医師と看護婦を送迎しました。当時はガタガタ道を、カーナビもなく、患者さん宅を探すのが大変でした。」

「一日に5軒くらいまわりました。」

「部屋に通されると、まず、ドクターからの母親への問診。その間に看護婦がブラウンペーパー（50cm×50cm）を広げ、聴診器、舌圧子、メジャー、フラッシュライト、アルコール綿、注射器、テストチューブ（試験管）、ゴムバンド、新聞紙で作ったごみ袋を並べました。次に、ドクターの診察。頭囲と胸囲、身長を測ります。異常があれば、看護婦が母親から採血をします。」

玉垣氏、湊氏の証言から遺伝学調査における家庭訪問はアメリカ陸軍のジープを使用し、日本人医師、看護婦、運転手の3名で実施していたことが明らかとなった。玉垣氏の証言から遺伝部の調査は乳児の外表奇形の診察が主であったことが把握できた。湊氏の証言から看護婦の家庭訪問時の主な業務はこうした医師の診察の介助であったことが明らかとなった。

3) 健康調査における健康診査時の看護

1950(昭和25)年11月にABCCが宇品にあった仮施設から広島市比治山山頂の施設に移転し、内科、小児科、遺伝部、歯科、眼科、婦人科、外科が設置された²⁾。1949(昭和24)年3月から広島で主要小児研究プログラムが、1950(昭和25)年1月から白血病調査、8月から成人医学的調査が開始された。医師、看護婦らの証言から身体的な健康診査の項目や健康診査のためABCCに来所した被験者一人につき看護婦一人が対応していたことが見出された。また証言から健康診査を受けた被爆者の反応も明らかとなった。以下に玉垣氏、田中氏、湊氏の証言を示す。

内科外来に勤務していた田中久江氏の証言

「連絡員の説明に説得されて来所された患者さんを玄関にお出迎えし、更衣、諸検査、医師の診察を終了されるまでを一对一で看護し、玄関へお見

送りしてました。」

「現在も二年に一回の来所を続けている友人は、はじめはモルモットだと言われていたし、若かったからわずらわしかったが、年を取ってからは、ABCCに行き診てもらって安心感があり、親切で丁寧で至れり尽くせり、万一病気があればほかの病院へ紹介してくださるし、体重なども変化を二年間毎のグラフを記録して送ってくださる、今は申し訳ない気持ちで一杯と話してくれます。」

湊潔子氏の証言

「患者さんは、ドライバーが、コンダクターと共に迎えに行きます。受付の人が出迎え、一人のナースがずっと付き添います。」

「診察室のコーナーで、ガウンに更衣してもらうのですが、女性の場合は、穴あきのドレープ（90cm×90cmの木綿の布で、中心に25cm位の穴がある）をかぶり、その上にガウンを着用しました。無駄な露出を防ぐためです。次に別の棟のレントゲン科へ。また、元の棟に戻り、採尿、採血、身長、体重測定（インチとポンドで表記）、検温、血圧測定等をすませます。」

「次に、日本人の医師による診察、その後、アメリカ人の医師が再度チェックしました。患者さんへの説明は通訳がつかしました。」

「診察後、私服に更衣してもらい、終了です。自宅までドライバーが送りました。」

「患者さんが検査のために移動していただいたのは、100メートル余り、所要時間は、40～50分かかりました。」

「診察の結果、全ての検査で異常がなければ、担当医が患者さんに封書でお知らせします。異常があれば、再度検査をします。」

「小児科も内科と同じく医師の診察の介助です。発達段階での調査のための計測は重要でした。」

「医師も看護婦も患者さんの為、誠心誠意、一生懸命業務にあたっていましたので、個人的な会話をする余裕もなく、小児科の患者さんも含めて、不平、不満の声を聞いた事は一度もありませんでした。むしろ、喜んでもらっていると信じておりました。」

玉垣氏の証言

「最初のころですが、日本人の医者が診て、その後アメリカ人の医者がチェックするようなシステムでした。それがどんどんチェックがなくなってきた感じですかね。時々わからないことは一緒に診察をしていました。」

ABCC の健康診査は被爆者と同数の対照群である非被爆者に実施された。中村氏の証言から公平な健康診査を行うため、看護婦は来所した対象者が被爆者であることは知らされておらず、被爆者に対する言動や検査にも注意を払っていたことが明らかとなった。以下に中村氏の証言を示す。

「(被爆者と非被爆者と) 絶対わからなかった。チャート(カルテ)の上でも。ただ、向こうから被曝の話しをね、被爆ってこうだったよって言って来たら知る程度で、こちらからは聞きません。」
「背景は聞かない。それは差別した診察をしてはいけないということが条件だったからですね。」
「(採血シリンジが) ディスポーザブルになぜならなかったのかっていうのはね、研究主体のところなので、いわゆる採血の仕方とか器具が変わるとあのいろんなデータに誤差が出てくるのではないかということがありましてね、一般の病院の多くは全部ディスポを使ってもここだけはガラスのシリンジで…大変でした。」

VII. 考察

1. ABCC の健康調査および健康診査における看護

1) 健康調査における家庭訪問時の看護

ABCC は開設当初から遺伝学的影響の有無を調査することを重視しており、前述したように最初に行った健康調査は遺伝学調査であった。この遺伝学調査は 1948(昭和 23)年から 1954(昭和 29)年までの 6 年間行われた。遺伝学調査における立案過程の詳細は、看護婦の証言からは把握できなかった。しかし、遺伝学調査を計画した James V. Neel¹⁰⁾ は、終戦直後広島・長崎に居住していた 5 カ月の妊婦のための特別配給制を活用し、妊婦が市内各所の保健所に妊娠登録を行う時に個人を同定する情報と被爆歴を入手し、その後子供の出生情報を得る計画であったと述べている。こうして、広島、長崎市、呉市の

全妊婦の 93% 以上が ABCC に登録された⁹⁾。また、当時の分娩の約 90% は助産婦による家庭分娩であり、ABCC は開業助産婦から出産の報告を受け、乳幼児の家庭訪問を行った。

ABCC が行った乳幼児の家庭訪問について、玉垣氏、湊氏の証言から米国陸軍のジープを使用し、日本人医師、看護婦、運転手の 3 名で行われていたことが明らかとなった。Susan¹¹⁾ は家庭訪問を困難にさせていた一つの要因に、終戦後の広島、長崎は街路標識がなく、住宅を探すことが困難であったことを報告している。湊氏の証言からも終戦後の日本は道も整備されておらず、ジープで移動することの困難さが推察される。こうした悪路で住宅を特定することが困難な中、一日 5 軒程度の家庭訪問を実施していたことが把握できた。

玉垣氏の証言から、家庭訪問では乳児の外表奇形の有無を主として観察していたことが明らかとなった。出産後に得る情報は、子供の性別、出産時の生死、先天的奇形の有無、出生時体重、新生児死亡であり¹⁰⁾、これらの情報を得るため、問診、診察を行ったことが考えられる。湊氏の証言からドクターズバックの内容は、聴診器、メジャーなど診察や計測に必要なものであることが示された。これらの診察器具を使用して医師が診察しやすいように診察器具を揃え、必要に応じて採血をするなど、家庭訪問時の看護婦の業務は医師が行う乳幼児の診察の介助が主であった。James¹⁰⁾ は遺伝学調査における重要な任務を果たした職種の一つとして家庭訪問時に医師の診療の介助を行った日本人看護婦を評価している。遺伝学調査は初期の ABCC の健康調査において最大の調査であり、1953(昭和 28)年の調査終了までに約 7 万 6 千人の子どもたちが検査された¹⁾。このような大規模な健康調査を遂行するにあたり、日本人看護婦が果たした役割は大きかったと考える。

2) 健康調査に伴う健康診査における看護

1950(昭和 25)年 11 月に ABCC の施設が完成し、内科、小児科、遺伝部、歯科、眼科、婦人科、外科の外来において各健康調査における健康診査が行われた。ABCC の医学的調査計画の概要²⁾によると、ABCC の健康診査は、連絡員と健康診査の予約を決めて来所した後、看護婦、医師による初診の際の病歴聴取、採血、採尿、胸部レントゲン、心電図検査を行い、検査結果を郵送すると記載しており、看護

婦らの証言と一致していた。今回、玉垣氏、湊氏の証言から、健康診査を開始した当初、医師の診察は、日本人医師の診察後に米人医師が再度チェックを行っていたことが明らかとなった。この理由について、玉垣氏、湊氏の証言からは把握できなかった。しかし、米人医師が再度チェックを行っていた背景には、戦争終結時、日本人医師の訓練不足とそれに伴う医療ケアの水準の低さが問題視されており、GHQより医学教育の改革が行われていたこと¹²⁾、ABCCは米国の組織であり、米国式の診断が必要であったことなどが考えられる。

ABCCにおける健康調査に基づく健康診査は被爆者と非被爆者に実施されており¹⁾、初診の際に病歴、家族歴、主訴の聴取はあったが、中村氏の証言から被験者の被爆の有無について看護婦は把握していなかったこと、看護婦は被爆者に対する言動に注意し、採血シリンジ一つにしても検査結果に誤差がでないよう配慮していたことが示された。この理由として中村氏はABCCが調査研究機関であり、被爆者と非被爆者の健康診査を公平にするためであったと述べている。このように検査結果を厳密に扱う必要があったABCCの看護婦の健康調査および健康診査の対象となった被験者に対する配慮は診療機関とは異なり、調査研究機関としては特徴的な看護であったといえる。ABCCの健康調査に伴う健康診査における主な看護業務については湊氏の「小児科も内科と同じく医師の診察の介助です。発達段階での調査のための計測は重要でした。」との証言から、小児科、内科においても遺伝学調査と同様に医師の診療の介助であったことが明らかとなった。この中でも小児科では発達段階の調査のため、計測は重要であったと述べており、外表奇形の観察に重きを置いていた遺伝学調査とは重要とされる看護の視点が異なっていたことが示唆された。広島ABCCでは1949(昭和24)年から放射線に被曝した小児の成長と発達を探索する主要小児科研究プログラムが開始されており、放射線による被曝の影響が小児の発達にどのような影響を及ぼすのかを調査するうえで身体計測は重要な看護の一つであったことが考えられる。

看護婦らの証言から来所した被験者の健康診査は一人につき40～50分程度かかっていたが、この間看護婦は被験者が診察を終え帰宅するまで一対一で付き添っていたこと、女性に対しては無駄な露出を

避けるなど羞恥心に配慮した看護を行っていたことが把握できた。田中氏の証言から、当初はABCCで健康診査を受けることに対して、実験動物のようなモルモット扱いだと感じていた被爆者も、後年は健康診査を受けることで安心感があった、親切で至れり尽くせりであったと述べており、ABCCに対する感情が変化した被爆者もいたことが把握できた。また、湊氏は、医師も看護婦も誠心誠意、一生懸命業務にあたっていたと述べている。ABCCの研究調査については否定的な意見もあり¹³⁻¹⁵⁾、看護婦の証言にあるように、ABCCの健康調査および健康診査に対して否定的な感情を抱く被爆者の存在もあった¹⁶⁾。しかし、田中氏の証言のように後年、ABCCに対する感情が肯定的に変化した被爆者がいた背景の一つには、ABCCの看護婦が被爆者に対して誠心誠意、看護を提供したことが関係していたのではないかと考える。ABCC看護婦の活動については、ABCC設立草創期に勤務していた遺伝学者であるJames V. Neel¹⁰⁾や小児科医であるRobert W. Miller¹⁷⁾が「診察室でこれ以上の看護サービスが提供されたところはなかったろう。」と高く評価している。ABCC看護婦は被爆者の感情に配慮し、健康調査および健康診査に対する緊張を緩和する重要な役割を果たしていたと考える。

VIII. 研究の限界と今後の課題

本研究はABCC設立草創期に行われた健康調査、健康診査における看護活動を明らかにするために、元ABCC医療職の面接調査を実施し、オーラルヒストリー法を用いて分析した。日本人医師、看護婦の証言からABCCが行った健康調査および健康診査は実施された期間や調査内容に特徴があり、今後は時期区分や調査内容に応じてさらにインタビュー内容を詳細に分析する必要がある。

IX. 結論

本研究では、ABCC設立草創期の健康調査および健康診査における看護を明らかにするためオーラルヒストリー法を使用して、元ABCC日本人医師、看護婦の証言を分析した。結果、ABCC設立草創期の健康調査、健康診査における主な看護は診療の介助であったが、各診療科では健康調査の目的や調査概要によって重要とされる視点に基づき、看護を実施していたことが示唆された。また、調査研究機関

として精密なデータを収集するという役割があり、被爆者に対する言動や調査方法に配慮した看護が行われていたことが明らかとなった。ABCC 設立草創期は ABCC の健康調査および健康診査に対して被爆者から否定的な言動もみられたが、看護婦は患者に対して誠心誠意、被爆者の感情に配慮し、健康調査および健康診査に対する緊張を緩和する重要な役割があったと考える。

謝辞

本研究のために貴重な体験をお話して下さった玉垣秀也氏、湊 潔子氏、田中久江氏、中村豊子氏、また資料等の提供や ABCC の研究活動に関するご助言をいただきました放射線影響研究所児玉和紀先生、若本明美氏に深く感謝を申し上げます。

研究助成

本研究はどの機関からも研究助成を受けていない。

利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

引用文献

- 1) 国立予防衛生研究所, 原爆傷害調査委員会 (編). ABCC—予研共同研究総括報告 1947-1975. 原爆傷害調査委員会, 広島. 1978, pp. 220-240.
- 2) 原爆傷害調査委員会. A brief review of the ABCC medical program. 広島医学. 1962, 15(8). 764-770.
- 3) 木永勝也・長崎女性史研究会. 聞き書き 藤田芳子の戦前・戦後: 大連での生活と長崎 ABCC のこと. 平和文化研究. 2012, 33. 73-101.

- 4) 新村出編. 広辞苑. 岩波書店, 第6版第1刷, 東京. 2008, p. 2381.
- 5) 中村正紀. 昭和の記憶を掘り起こす—沖縄、満州、ヒロシマ、ナガサキの極限状況. 小学館, 東京, 2008. p. 13.
- 6) 東京大学教養学部歴史学部会 (編). 史科学入門. 岩波書店, 第4刷, 東京, 2012. pp. 2-5.
- 7) 小山田信子、高橋みや子. 明治6年から明治15年までの史料に見る宮城県における公文書の伝達経路. 日本看護歴史学会誌. 2005, 18. 60-68.
- 8) 国立予防衛生研究所, 原爆傷害調査委員会 (編). ABCC20年の歩み. 国立予防衛生研究所, 東京, 1966. pp. 1-19.
- 9) 原爆傷害調査委員会. Atomic Bomb Casualty Commission The first fifteen years. 広島医学. 1964, 17(4). 317-324.
- 10) Neel JV. The very early years of the ABCC Genetics program, 1946-1951. RERF Update. 1990, 2(3). 6-9.
- 11) Lindee MS. Suffering Made Real: American Science and the Survivors at Hiroshima. The University of Chicago Press, Chicago, 1994. pp. 57-115.
- 12) 杉山章子. History of the non-military activities of the occupation of Japan 1945-1951, 22, Public Health. 日本図書センター, 東京, 1998. pp. 127-132.
- 13) 中川保雄. 広島・長崎の原爆放射線影響研究: 急性死・急性傷害の過小評価. 科学史研究 第II期. 1986, 25(157). 20-33.
- 14) 杉原芳夫. ABCC問題について. 日本の科学者. 1967, 2(3). 29-33.
- 15) 高橋博子. 冷戦下における放射線人体影響の研究: マンハッタン計画・米原子力委員会・ABCC (特集 国際原子カムラ: その虚像と実像). 日本の科学者. 2015, 48(1). 6-13.
- 16) 長澤克治. 小児科医ドクター・ストウ伝. 平凡社, 東京, 2015. pp. 111-152.
- 17) Miller. RW. Miller's memories of ABCC-RERF, 1953-1990. Part I. RERF Update. 1993, 5(4). 7-9.